

「GUTAI」展と抽象画の楽しさ

酒井恵三

十月下旬に大阪へ旅行した際、中之島の国立国際美術館と大阪中之島美術館で観た「GUTAI 分化と統合展」ほど、衝撃的かつ抽象画と言う物に対する根本的な見方を、私に教えてくれた展覧会は無かった。第二次大戦後アンフォルメルと言う抽象画運動がフランスを中心に興隆し、世界的にも大きな潮流となったと言うが、現在では抽象絵画の大規模な展覧会は日本の都会に於いても、実はそれ程多く開催されているとは言いがたい。それが我々にとって、抽象画が馴染みが薄い理由の一つになっている事は否めないと思う。「GUTAI展」の内容だが質量共に実に充実しており、観ていて実に楽しかったと言うのが、正直な感想だ。

前衛画家・吉原治良氏（じろう）を中心に戦後芦屋で、具体美術協会は結成された。吉原氏は現在のJ・オイルミルズの前身の一つでもある吉原製油の社長でもあると言う、実業家の顔も持つていた人物であり、具体が終始潤沢な資金で活動出来たのは、彼の存在が大きいと思われる。吉原氏を始めとする具体のメンバーは、当初シュール（超現実主義）や舞台パフォーマンス等を指向していたと言うが、徐々に抽象画にシフトして行く事になった。実際具体の抽象画作品群は、欧州のアンフォルメルと比較しても決して創始時期や内容共にひけを取るものではないと言う評価を、現在では受けている。そういった事も知らずにいた自分自身を恥じたものだった。

抽象画は具象画と違い、見る者が実に様々な解釈が出来る所が楽しい。私はこれらの絵を観る事で、そこに音楽を感じたり、現代都市の街並や息吹きを感じたりもした。恐らく私が理系の人間で、数学や物理学の法則にもっと精通していたとしたら、これらの作品群をもっと楽しめるのではないだろうか。そうした事もふと感じたが、それでも自分なりの解釈を存分に出来る抽象画群を、大いに愛（め）でていた積りである。

「GUTAI展」のサブタイトルは「分化と統合」とされており、大阪中之島美術館で「分化」、国立国際美術館で「統合」を扱っていた。「分化」では、それぞれの独創の内実に迫り、「統合」では、集団全体の、うねりを伴う模索の軌跡を追うと言う事らしかった。私は実は、順番を間違えて（？）国立国際美術館の「統合」の方を先に観てしまったが、それでも「具体」と言う美術運動の全体像を俯瞰する事は十分可能だった。私の目を引いたのは、

初期の「具体」のパフォーマンスを記録した8ミリフィルムだった。確か昭和三十年代前半のものだったと記憶しているが、当時としては鮮やかなカラーフィルムに過激なパフォーマンスの一部始終が記録され、彼等の先進性、そして如何に潤沢な資金に裏付けされていたかに圧倒されたものだった。

両美術館に展示されている抽象画の大作にも、叩きのめされる様な衝撃を受けた。これらの作品群から教わったのは、何事も先入感無しに受け入れる事の重要性ではあるが、これは口で言うほど簡単に出来る事では無い。それを成し遂げた彼等は、やはり或る意味異端者だったのだろうと、私は感じずにはいられなかった。